

“結ぶ”ということ

笹沢園子

あるひとつの保育体験をもとに、“結ぶ”ということを考えて
いきたいと思います。

〈事例…S子に於けるひも結びの意味〉

一(一) 五歳児のクラス(二学期)のこと。大型積木を使って、
クラスのほとんどの子が参加して、基地作りの活動。

S子(五歳六か月女)も参加。

一(二) 基地はほぼ完成し、屋根を作ろうとの声があがる。ある
子の発想(プラスチック製の脱衣カゴの網目にひもを通し
て結びあわせ、それを連ねていってひとつの大きい屋根に
する)により、屋根作りの作業開始。

一(三) S子は、この作業が自分にとって困難すぎることを見て
とり、他の子にさんさん入つ当りして、その場を逃げ出

す。

一(四) 保育者は、「困難でも逃げ出さず、自分なりに努力して
ほしい」と思い、半ば強制的に、ひもを結ばせ屋根を作ら
せる。

一(五) S子にとって、やはり、この作業は困難だったらしく、
泣き泣き試行錯誤を繰り返していたが、ひもを口にくわえ
たりしながらも(これも、考察するとおもしろいが、今回
は割愛する)、どうにか、ひもが結べるようになる。

一(六) これ以後も、毎日のように、クラス全体の動きとして、
ひも結びが遊びの中に入ってくる。

さて、このひも結びの活動と前後して、S子の生活に、次のよ
うな変化が見られた。

二(一) S子は絵が好きな子で、これまでも度々、自分の部屋か
らクレヨンと自由画帳をもって来て、他の子が遊んでいる
ホールの傍で描画することがあった。

二(二) その時、早く描きたいとあわててへやから走り出るため、
クレヨンを床に落して散乱させてしまうこともあり、そう
いう時には、いくら落ち着かせようとしても、ただ泣きわ

めくばかりであった。

二一(三) ところが、このひも結びの時期と前後して、たとえ、ク
レヨンが床に散乱してしまっても、まずクレヨンを拾って
から、ホールへ急いで走っていくようになったのである。

〈考察・保育に於けるイメージの探究〉

この事例から、幾つかのことが考えられる。まず、一と二は、
本當につながるのがあることなのかどうか。偶然、同じ時期に、一
や二のある意味でS子にとって目立つ活動が出てきたのではない
か。この問題を解決するためには、同じ時期の事例を数多くあげ
て検討する必要がある。

また仮に一と二が関係のある事なら、どういう関係があるのだ
ろうか。心理的発達に於て、S子が一でも二でも、困難なこと
に立ち向えるようになった”ということだろうか。この解釈も一
理あり、S子の他の場面での活動と総合して考えれば、よりはっ
きりしてくると思われる。

しかしながら、この事例に於ては上記の見方とは少し異った見
方をしてみることもできると思う。その見方は、“保育に於ける
イメージの探究”という立場からのものである。“保育に於ける
イメージの探究”とは、今、ここに起きている事から(保育場面

で)を、既存の自分の枠組(心理学や保育学の知識だとか、し
つけなどの価値観を含んだもの……等々)を全てとり払い、事象
そのものを見ていく中で、その事実の中にある本質(意味)をと
らえていくことである。そのためになされるべきことは、まず、
事実をそのままとらえること、その事実を見ている自分に生起し
たイメージ(評価でない)をとらえて、そのイメージを發展させ
ること、その事柄にまつわる歴史的知恵(洋の東西を問わず、歴
史的にイメージ化されて来たもの)を参考にすること……等々で
ある。

この事例については、たとえば、結ぶという自分を實際
にやってみて、どのような感じをもつかとか、結ぶという作業を
みていると自分は何を思い起こすかということを整理したり、ま
た、結ぶという言葉の語源から人類普遍のイメージについて考え
ていったりするのである。

これらの作業を通して、我々は、そこに生起している事柄の、
表面的、一面的でない、真の内面的意味を理解するのである。

ここで先の事例にもどって、とりとめもなく想いを巡らすこと
によって、結ぶということの意味を探ってみよう。

どういう時に、“結ぶ”という言葉が用いられ、それがどうい

う意味をもつものなのか。たとえば、人と人とが結ばれるという言い方をする。条約を結ぶとも言う。その他諸々。これらの事から、一般に「結ぶ」ということを考えていくと、そこに、ある共通したものが見えてくる。ある二つのもの（根元ではひとつになっているかもしれないが、少なくとも見えるところでは別々で独自のもの）が出会い、その出会うところで、ひとつのものとして、その別個であることを克服していくところの活動である。人と人との結ばれに於ては、別個な人格AとBとが、その結び目（たとえば愛情）を中心として、AとBの調和した新しい世界を作っていくし、条約の結びに於ては、別個の国であるAとBがある協定という結び目によって、新しいAとB両国の関係（たとえば友好関係）を作っていく。

また、別の方面へ想いを巡らせてみると、たとえば、日本文化を代表する風呂敷や着物など、もともと、外側と包まれる内側が別個に存在しているも、ひとたび「結ぶ」という行為が入ると、その両者は、機能の面でも、格調の面でも、全く新しい世界を作る。よく、着物を着る人が、「最後に帯をしっかりとしめる（結ぶ）と、気持がシャンとする」という言い方をする。結ぶことから、あたかも新しい人間に生まれ変わったかのようなのだ。

また慶弔の時使う「水引」というのがある。吉事には赤・白・

金、凶事には、白・黒などを使う。これは、赤は赤、白は白、黒は黒で独自に意味を持ちつつ、その結び方で、慶弔様々の意を作

る。
以上のように、別々の存在であることをそれぞれ保ちつつ、「結ぶ」というひとつの出会いに於いて、新しい世界を展開していく活動……として、この「結ぶ」ことの意味を考えてみるのもおもしろいと思う。

さて、前記のような想いをもちつつ、この事例について更に考えてみよう。S子にとって、この「結ぶ」ということは、どのような意味をもっていたのか。これを考えるに当って、もう一度目に留めたいのは、一（白）作業の難しさを知ったS子が、他の子に八ツ当りしてからその場を逃避すること。二（白）早く描画したいのに、クレヨンをこぼし泣きわめくこと。これら二場面で共通していることは、二つの別個の力（矛盾した力とも言えよう）の前で葛藤しているS子の姿である。前者では、基地作りはしたいができない。後者では、早く描きたいが拾ってからでないと描けないし、拾っていると遅くなる。しかし、S子は、「結ぶ」という活動と前後して、この矛盾に対する葛藤を解決し、それを乗り越え、自分を制御統一していく方向に踏み出したのである。つま

り、泣き泣きでもひもを結んで屋根を作ったり(一―四)、クレヨン
をまず拾ってから、大急ぎで絵を描きに走って行く(二―三)
ということができるようになってきたのである。

ここでは、S子に於て、先程一般的事柄に於てイマジネーション
を働かせ想いを巡らせたのと同じこと、つまり、別個の力を、
「結ぶ」という点で統一し、新しい自己の世界を作り出していっ
たことが、推測されるだろう。

保育に於て、「イメージ」をとらえていくということで、以上
に見て来たように、ひとりの子どもの活動の過程を通して、子ど
もと共に、子どもの世界を経験することが可能となり、また、そ
のこと自体、大人が既存の枠にとらわれない新しい生活へ入って
いく糸口となるのである。(お茶の水女子大学 大学院)



結ぶ

――出発と終息の十字路――

本田 和子

古い時代に、女たちは、愛する人を送るとき、その着衣の紐を
心をこめて結んだ。彼女らは、「結ぶ」ことによって、離れてい
く人の上に何を祈ったのであろうか。「結ぶ」とは、「封じ込め
る、保つ」という意を持っている。肉体に紐を固く結ぶことは、
靈魂を内に保つ行為であった。愛する人の靈をその体に封じ込
め、健やかな旅を願ったのもあろうか。そしてまた、再会する
その日まで、肉体も魂も変ることなく、という女の想いも込めら
れていたことだろう。結ばれた紐は、結んだ女が解くべきものと
されていたという。

各地から出土する縄文の土器、とりわけ瓶のような器の上部
に、紐が巻きつけられしっかりと結ばれたものが見出される。ま
た、同じ出土品の石棒の頭部にも、藤つるの皮などが巻かれ、固